

# 御射山第二遺跡

～緊急発掘調査報告書～

昭和55年

箕輪町教育委員会

# 御射山第二遺跡

昭和55年

箕輪町教育委員会

## 序　　言

上棚地区的圃場整備事業開始に先立って行われた御射山遺跡の緊急発掘の報告書であるが、竜東の上棚、福与地区は縄文早期から始まる古代遺跡の密集地帯で、特に御射山遺跡は櫛屋神事と関連して考えられる古代、上代遺跡の中心で、期待も大きいものがあった。

果せるかな、縄文中期に属する多くの住居址と、謎を含んだ柱穴列址、数多い土器石器の出土を見たのである。

現地に立って見ると、南西に向いた緩斜面で、背後に山を負う、水利と排水に恵まれ、さらに天竜川流域を俯瞰し、前面に遙か西駒ヶ岳の威容を望む居住環境としては実に素晴らしい地点で、縄文人の居住地選定の感覚の確かさを今更のように感嘆したものである。

遺跡と出土遺物の解明は、林団長の優れた解析力に依って漸次明らかにされるところであろうが、諏訪明神信仰の御射山神事などと関連づけた解明なども期待したいところである。

終りに酷暑を押して発掘に当られた調査員、補助員、地元の協力者のみなさんの御努力に対して心からお礼を申上げて序言とします。

箕輪町教育長　河手貞則

## 凡　　例

1. この調査は、箕輪町三日町上棚地籍の農業基盤整備事業に伴うものであるため、事業着工前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は図版を主体とし、文章記述は簡略とした。
3. 土器の拓影及び実測図は寸、石器は寸と寸の2種類とした。
4. 遺構の縮尺はそれぞれの図にスケールを入れ示してある。
5. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。  
　・本文執筆者 林 茂樹・柴 登巳夫・竹入洋子  
　・図版製作者、土器・石器の実測、土器拓影  
　　藤森美枝・竹入洋子・石堂雅子・藤沢伸子  
　　柴 登巳夫  
　・写真撮影 林 茂樹・柴 登巳夫
6. 本報告書の編集は主として箕輪町教育委員会があたった。

# 目 次

序 文

目 次

挿図目次

図版目次

表 目 次

第Ⅰ章 遺跡の立地 ..... 1

  第1節 位 置 ..... 1

  第2節 自然環境 ..... 2

第Ⅱ章 発掘調査の経過 ..... 3

  第1節 発掘調査に至るまで ..... 3 ~ 4

  第2節 歴史的環境 ..... 5 ~ 6

第Ⅲ章 発掘調査の結果 ..... 7

  第1節 調査結果の概要 ..... 7

  第2節 遺 構 ..... 9 ~ 11

  第3節 遺 物 ..... 12 ~ 19

第Ⅳ章 まとめ ..... 20

## 挿図目次

第1図 位置図.....	1
第2図 遺跡周辺の地形.....	2
第3図 周辺遺跡分布図.....	6
第4図 地形及び発掘区域図.....	7
第5図 遺構全測図.....	8
第6図 柱穴列柱実測図.....	9
第7図 柱穴地層断面図.....	10
第8図 集石遺構実測図.....	10
第9図 溝状遺構実測図.....	11
第10図 石器実測図(1).....	12
第11図 石器実測図(2).....	13
第12図 土器実測図.....	16
第13図 土器拓影(1).....	17
第14図 土器拓影(2).....	18

## 図版目次

第1図版 発掘区全景
第2図版 遺構
第3図版 遺構
第4図版 遺構調査状況
第5図版 遺物出土状況
第6図版 出土石器
第7図版 出土土器

## 表目次

表一 石器要目一覧表.....	15
-----------------	----

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位 置（第1図）

御射山第二遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町233・234番地に所在する。西南にゆるやかな傾斜面を呈した扇状地上に位置している。国鉄飯田線木下駅の北東約1kmほどにあり、箕輪町を一望できる所である。標高は765m前後で眼下を流れる天竜川との比高約100mを計る。

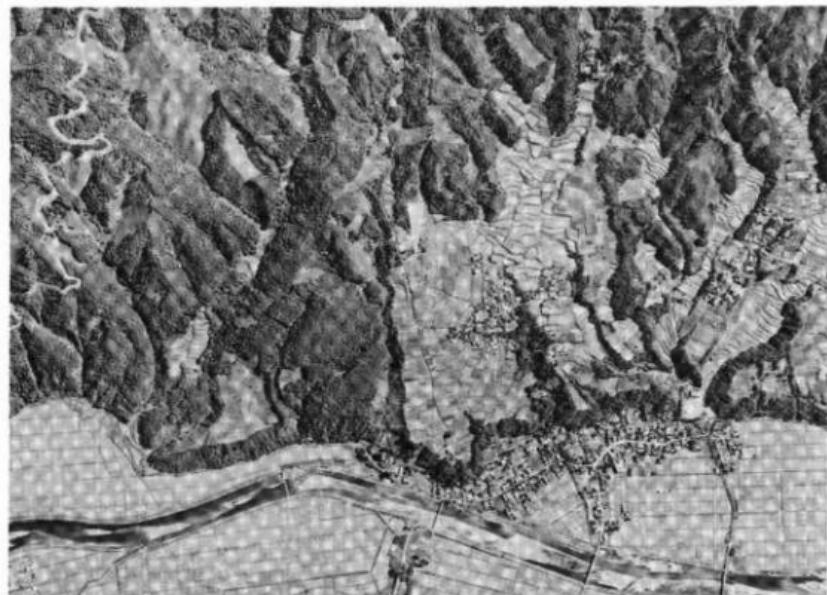


第1図 位 置 図

## 第2節 自然環境

箕輪の町を東西に二分するように流れる天竜川は、広い沖積面と河岸段丘地形を形成している。天竜川西の地域は経ヶ岳山麓から東方に流下する小河川、即ち、大泉川、帶無川、深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。河川の運搬堆積によってでき上った複合扇状地形は東方に向って緩かな傾斜をしている。天竜川左岸（竜東）は背後にすぐ山を控え、その山地を侵蝕して西方に流下する小河川により、変化の多い扇状地形を形成している。又、山が急で河川の流れが早いため「天井川」のような特徴ある地形を見ることもできる。扇状地は小河川、湧水などにより順次侵蝕され、その度合は下流（西方）に行く程進み、残された面はロームに覆われ、多くは畠地、及び村落のある台地となっている。このように東西の地形もかなりの相違を見ることが出来るが、背後に控える山地の主な岩石も又違っている。西方のそれは粘板岩、砂岩、チャートなどである。東方の山地は花崗岩、閃緑岩、結晶片岩類であり、一帯は花崗岩の風化した砂土を多く見ることができる。遺跡の位置する地形は東西に傾斜する扇状地上にあり、まさに箕輪の地を一望にできる遠望の開けた所である。北には山を背負い、東側には豊かな湧水の出る所があり、日当り、遠望といい、住居をかまえるには絶好の場であったと思える。ここ上棚部落一帯は多くの遺跡が密集しており竜東における一大遺跡地帯を形成している。

柴 登巳夫



第2図 遺跡周辺の地形

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町三日町地籍の天竜川左岸台地上に位置する水田および畑作地帯で、地区一帯は水田と畑が点在し、排水の悪い畠田が多く、又区画も不整形で、小区画であり農業機械の導入にも支障をきたしている現状であった。このような現状を開拓するため、又水田の多目的利用のための乾田化ということも合せて計画されたのである。そして、農業基盤整備事業圃場整備上棚工区として事業が計画され、昭和54年度から実施されるはこびとなつたのである。それに伴ない、計画が示された昭和53年度から圃場整備予定地区内を数回にわたり現地踏査を実施した。その段階において、埋蔵文化財の包蔵が確認されたため発掘調査の計画を進めた。昭和54年度に入り、県教育委員会文化課の指導のもとに調査計画内容を検討し、諸届等を済ませる。その後日本考古学協会員林茂樹氏を調査団長とする調査団を組織し、第Ⅰ調査地区的調査に引き続き8月から記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなつた。

#### 1. 調査団

団長	林 茂樹	日本考古学協会員
調査主任	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
調査員	小池 幸夫	静岡大学学生
"	三沢 恵	立正大学学生
"	北条 芳隆	岡山大学学生
"	千葉 豊	静岡大学学生
"	酒井 俊彦	"
"	木下 久	立教大学学生
"	福沢 幸一	中央道調査員
参与	馬場 瞳一	箕輪町教育委員会教育委員長
"	原 茂人	" 委員長職務代理
"	戸田 宗十	" 教育委員
"	桑沢 良平	"
"	春日琢磨爾	箕輪町文化財調査委員会委員長
"	樋口 彦雄	" 委員
"	荻原 貞利	"
"	星野 和美	"
"	矢沢 齐治	"
"	市川 修三	"
"	小川 守人	"

参 与	堀 口 直 幸	箕輪町文化財調査委員
"	上 田 晴 生	"
"	藤 田 寛 人	"
事 務 局	河 手 貞 则	箕輪町教育委員会教育長
"	丸 山 昭 夫	" 教育課長
"	唐 沢 千 洋	" 社会教育係長
"	中 村 文 好	" 社会教育主事
"	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
"	竹 入 洋 子	"

## 2. 発掘調査の経過

圃場整備計画が示された昭和53年度より埋蔵文化財の有無についての確認調査を実施した。その結果御射山遺跡地区内における発掘調査が必要となり、昭和54年度に入り、実施の方向で計画を進める。調査団を組織し、7月下旬より御射山第一調査地区より作業を進める。表土を30cmほどブルトーザーで排土グリットの設定を行なう。8月中旬より第二調査地区に作業を進め、東西20m、南北12mの範囲に調査区域を設定する。東西10グリット、南北に6グリット計60グリットを設定し、調査を開始する。調査が進むにつれ東西に列状に並ぶ柱穴址状のピットが多数検出された。又、ところどころに流された砂にまじって土器片が集中して発見される。これ等の土器片の多くは角が丸くなり、磨りへった状態であり、かなり上から流されて来たものと思われる。又柱穴列の東には南北に走る溝状遺構が検出された。これは明らかに北から南へ流れた川と考えられたが、常に流れていた川のようには思えない所もあり、何の目的で掘られた溝かは、はっきりしない。この調査区内には縄文時代中期から平安時代にかけての遺物が出土しているが、遺構は平安時代であろうと推測する。以下に記した様な成果をあげることができた。



発掘調査風景

## 第2節 歴史的環境

御射山遺跡を取りまく歴史は、先史より、近世に至るまでじつに豊富である。今回の調査における時代的中心は、縄文時代中期と、平安時代である。しかし周辺においては縄文時代中期よりもさらに2~3,000年以前より人間の生活があったことが伺われる。本遺跡の東南400mのところにある澄心寺下遺跡は、縄文時代早期の押型土器を多量に出土し、竜東地域における早期土器類の最も多く出土した遺跡といわれている。又、東方山頂に位置する萱野遺跡も早期土器や石器を出土している(注1)。竜東における縄文時代早期遺跡はこれら以外にも数ヶ所あり、竜西地域に比してはるかに多くなっている。前期を代表する遺跡に本遺跡と地続きになっている出畠遺跡がある。過去において、この遺跡は諸磯式土器及び下島式土器のすばらしいものを出土している。今後十分注意しなければならない。この一帯東斜面は段丘に至るまでいろいろな遺物の分布する範囲で特に黒曜石片の多いのが注目される(注2)。又、遺跡の東斜面中ほどに天王塚と呼ばれる古墳が一基確認されている。この古墳は、戦後、庭石にする目的で、二回にわたり石室の石が運び出され、現在では、わずかにその残った石などから形を想像することができる。塚の中に10m四方にわたり約50cm程高くなり、残った石がわずかに見える。上棚部落の中にも一基あり、これは「おしりょう様」と呼ばれている。ここもわずかに石が三つほど顔を出しているにすぎず、古墳の形態はほとんど留めていない。このように先史からの遺跡はいたるところに見られる。又、本遺跡北の小高い場所に御射山社が祭られている(注3)。

注1 萱野遺跡は昭和38年秋に美輪町教育委員会により、故藤沢宗平氏を团长として発掘調査された。遺物は、縄文時代早期の押型土器、田戸下層式土器、鍬形錐、磨石等が発見されている。遺構としては一ヶ所のピットと住居址と思えるような場所も発見された。出土遺物は美輪町郷土博物館に展示してある。

注2 土地の人々は黒曜石の多く落ちている畠のことを「星クソ畠」というような呼び方をしている。昔から黒曜石片のことを、星のかけら、とか、星クソと呼んだことからこういう名がついたものと思う。

注3 御射山三社の本社は唐沢家(神職)のすぐ上にあってその場所を古来神府、又は御室と呼ぶが9月の例祭はこの神府社と美輪南宮神社秋宮の神体とを神輿で三日町上棚東方の山麓にある御旅所に遷して行なわれる。これを徳屋御狩の神事という。

美輪南宮神社にある神体は、9月の例祭に御旅所へ上って御射山三社の祭神のうちに加えて祭りが行なわれ、12月27日の夜、御神渡神事によって木下の春宮に遷され、7月の南宮社の夏祭り後また秋宮に遷される。

御射山三社には戦国の当時、武田信玄、木曾義昌がそれぞれ社領を寄進している。又、美輪遺跡内にある御室田はこれに関係する場所と考えられる。

柴 登巳夫



- |     |     |       |         |        |       |        |
|-----|-----|-------|---------|--------|-------|--------|
| ●御遺 | 射心  | 山下原輪  | 烟庭田樂    | 天鹿上    | 塙垣金城  | おしりょう様 |
| ⑤   | の古坂 | 林墳下森  | 樂山地墳口平  | 南中     | 山道墳路前 | 塙仏原城城出 |
| ⑨   | の平  | の森三号古 | 中羽の森二号古 | 中      | 塙路前   | 津      |
| ⑬   | 古   | せの    | 古墳口     | 羽の森二号古 | 塙路前   | 石黒本大   |
| ⑰   | の   | の上    | 口平      | 古墳口    | 塙路前   | 久保烟屋   |
| ㉑   | 王十中 | の上    | 平       | 古墳口    | 塙路前   | 久殿     |
| ㉕   | 上   | の上    |         | 古墳口    | 塙路前   |        |
| ㉙   | 中上  |       |         | 古墳口    | 塙路前   |        |
| ㉩   |     |       |         | 古墳口    | 塙路前   |        |

第3図 周辺遺跡分布図

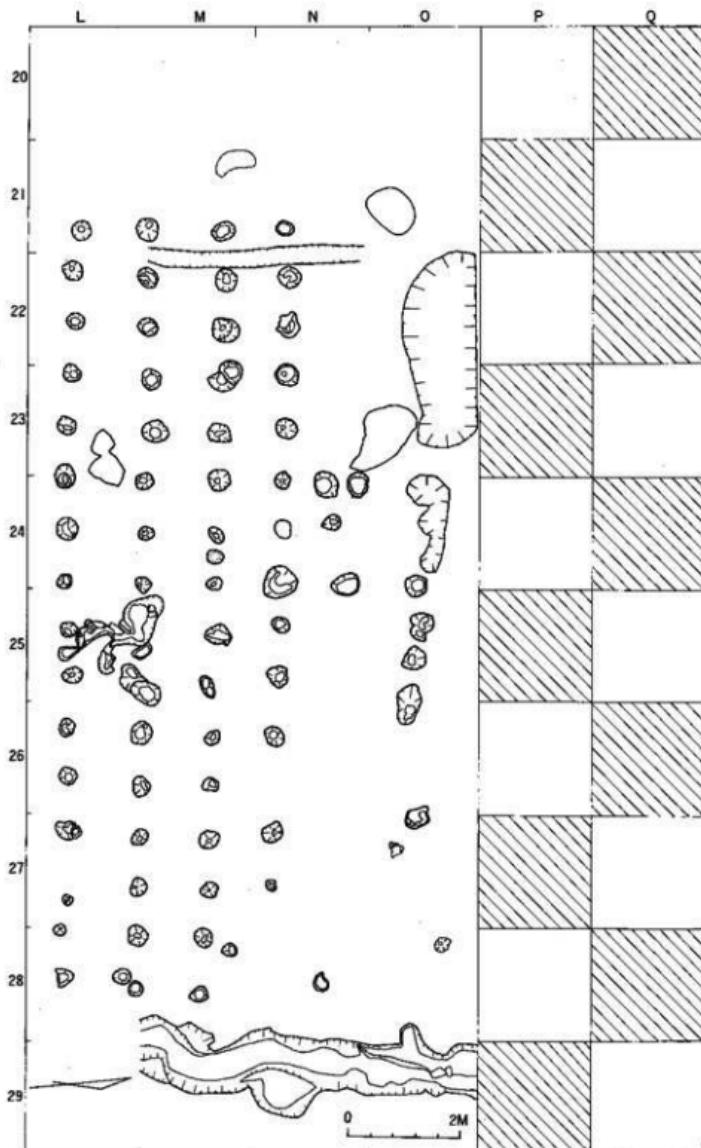
## 第III章 発掘調査の結果

### 第1節 調査結果の概要

御射山遺跡第一調査地区の作業が半ばになったので、第一調査区の東側に第二調査区を設定した。第一調査区においては縄文時代中期の住居址が多数発見されたので、第二調査区においてもほぼ同じような遺構が検出されるものと予想して作業を進めた。調査はQ列、P列より開始されブルトーザーによる表土の拂土が30cm程してあったが、ローム層に到達するまでに70cm程も掘らなければならなかった。出土遺物は縄文時代中期の土器片が少しあるが出土した。調査をO列に進めるとローム層上面にかなりの凹凸が現われるが、不規則で特別遺構のように思える所はない。結果的にはこれは耕作による擾乱であった。しかしある部分において、何ヶ所か柱穴状のビットと思えるものもあった。さらにN、M列に進むと柱穴状のビットが一定の間隔をおいて、列になって検出された。この列状のビットは4列発見され東西に約14m、南北に4mの範囲に確認された。この面より灰釉の小片がかなり発見された。この地域は南に約9度傾斜しており、遺跡上部から土砂が、かなり流れ込んでいる。それを裏付けるように凹地や一部のビット内に花崗岩の風化による砂土がぎっしり堆積している。又、それ等の内にはきまって縄文土器や、土師器が含まれている。N-23グリットを中心にして集石が検出されたが、これも上部からの流れ込みによる自然的なものである。柱穴列址東側に溝状遺構が発見されたが、川的な遺構と思えるが、細部は別項目で書く。



第4図 地形及び発掘区域図



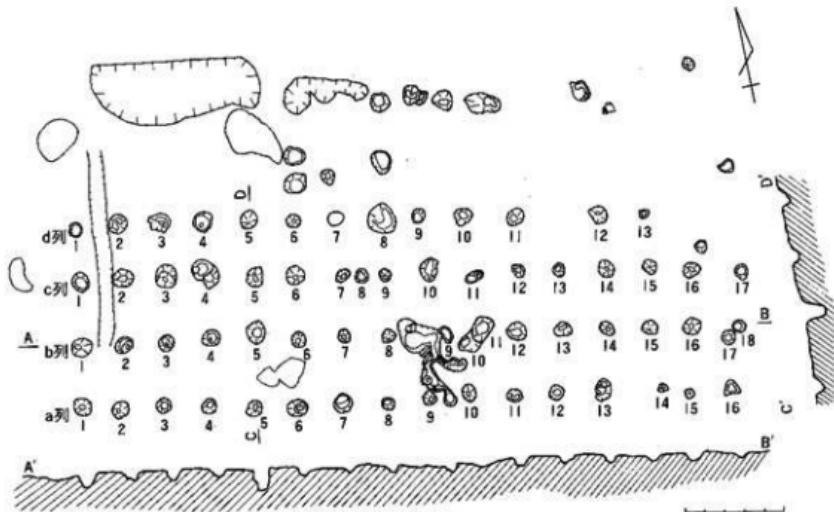
第5図 遺構全測図

## 第2節 遺構

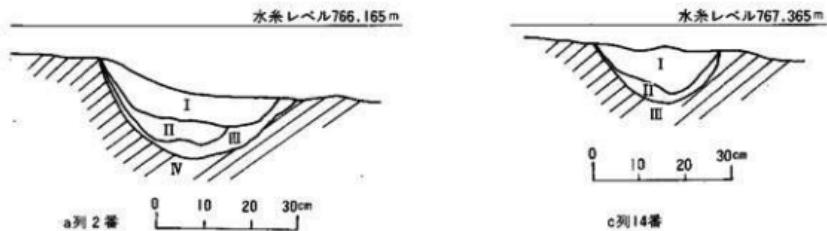
### 1. 柱穴列址 (第6図)

第二調査地区における主な遺構はこの柱穴列址である。本遺構は東西約4m、南北約4mの範囲に確認されている。柱穴列の確認された面は、東西にはほぼ平らで、南北には約9度の傾斜があり北が高くなっている。柱穴列址の確認されたものは東西に4列、1列16個の穴よりなっている。東西の柱穴間距離は90cmであり、a、b列間は135cm前後、b、c列間も同じ、c、d列間は115cmとやや狭くなっている。柱穴の深さは落込み確認面より15cmから25cmとほぼ一定している。柱穴の大きさは直径50cm以上の大さなものもわずかあるが、ほとんどのものは25cmから35cmの内にあり、形も円形が多い。柱穴の壁や底は、特別堅くはなっておらず、上部に建造物がありそれをさえたとすれば、底部が柔らか過ぎると感じた。以上が柱穴列址の概要であるが、この遺構がどのような性格のものかが問題である。上伊那における類例を見ると、箕輪町内に二例ある。昭和49年に発掘調査された猿楽遺跡と、中央道における調査で松島堂地地縄において、柱穴列址が発見されている。又、飯島町七久保柏木遺跡においても検出され、同遺跡でも柱穴間は90cmであったと報告されている。それぞれ遺構がどのようなものかは結論が出されていない。本遺構においてはa列の前にもまだ検出される可能性もあり(柱穴列のあると予想される位置は何ヶ所か調査したが堆土による多量の土盛りのため全体的にはa列までである)これが一つの建造物の柱穴址となると、大変大きな建物になる。現在ある御射山社に関係ある跡ではないだろうかという説も考えてみたが結論は出す今後の研究に待ちたい。なおこの柱穴列址の時代は灰釉陶器片が伴っていると考えるが細部は考察に記した。

柴 登巳夫



第6図 柱穴列址実測図



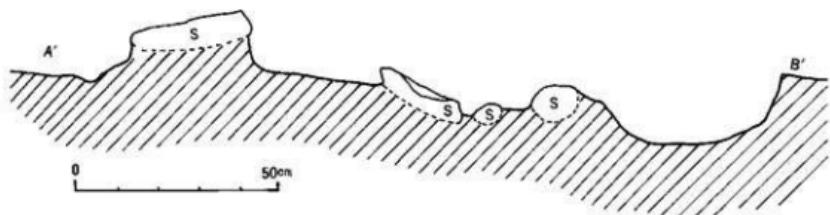
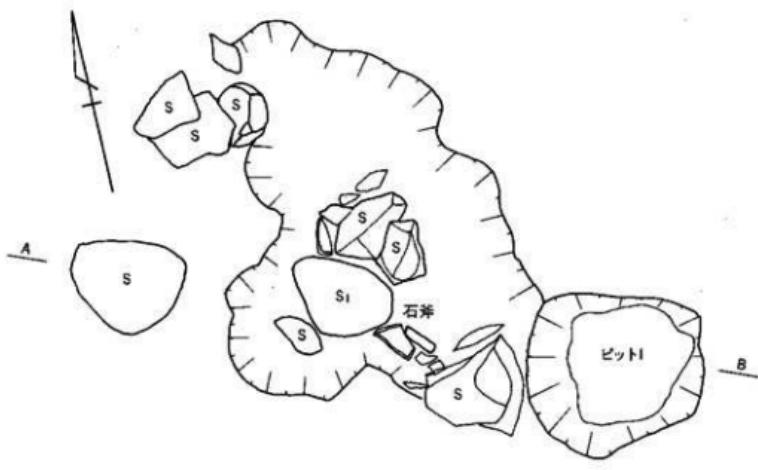
ピット a列 2番 層序説明

第Ⅰ層 [黒褐色土層] 黒味の強い黒褐色土でロームブロックが少し入る。  
第Ⅱ層 [褐色土層] ローム粒がわずかに入る褐色土。  
第Ⅲ層 [褐色土層] 黒土のブロックが少し入る。  
第Ⅳ層 [ローム層]

ピット c-14番 層序説明

第Ⅰ層 [黒褐色土層] ローム粒がわずかに含まれている。  
第Ⅱ層 [褐色土層] 黒土と褐色土の混合。  
第Ⅲ層 [ローム層]

第7図 柱穴地層断面図



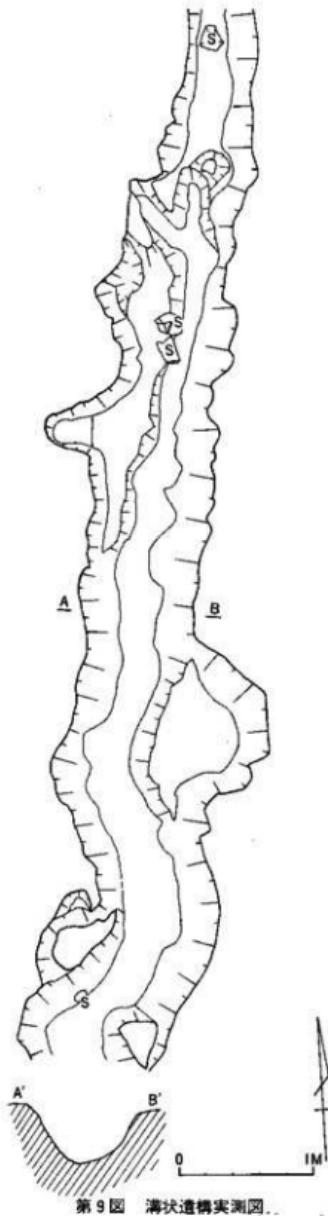
第8図 集石遺構実測図

## 2. 集石造構（第8図）

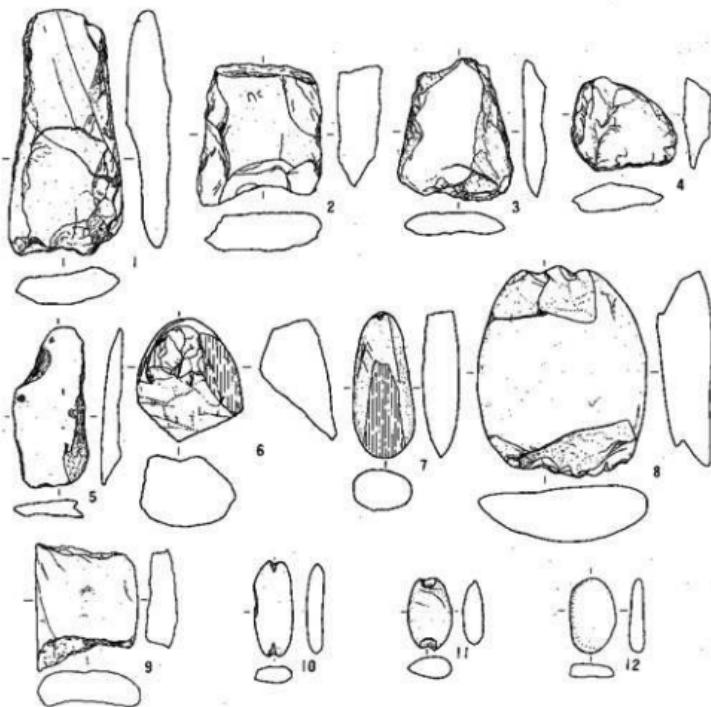
第二調査区N-23グリットを中心に集石が検出された。この集石は人為的に集められたものではなく、上方から流れでここに留ったものと考える。この集石の周辺は少し凹地になっており、この地帯特有の花崗岩の風化した砂土が、流れ込み凹地内に堆積したのである。第8図ピット1は直径40cm、深さ15cmであるが、この中に砂土に含まれて約50片の土器、石器が入っていた。第11図-23の黒曜石製のスクレイバーもその一つである。それ等の土器片は縄文時代中期のものが多くほとんどが表面や角が磨りへって文様もよくわからないくらいになっている。中には高台付きの土師の壺も含まれている。又、S<sub>1</sub>の石の下には砂岩質の大型打製石斧が検出された。（第10図-1）この打製石斧も上方から移動して流れこの凹地に留り、その上に石が乗ったものと考えられる。これ等の状況からここは上方からの雨水の集まり道のような所であったと予想される。今回の調査期間中にも何度か集中雨に会ったがそのたびに多量の土砂の流れ込みで、柱穴が一夜にして埋ってしまうことがあった。傾斜地における土砂の移動量の多いのに改めておどろかされた。

## 3. 溝状造構（第9図）

本造構は柱穴列址の東側、29-L、M、N、O、Pのグリットにかけて検出されたものである。図に示すとおり、溝は上方北より南に向って走り、溝は完全に川の様子である。溝は巾50cmから80cmくらいで、深さは上部では30cmと浅く、下部は50cmから60cmと深くなっている。溝は一部分で蛇行しているが、溝の底部は花崗岩の風化した砂が流れ込み溝の中を水が流れたことを物語っている。この溝状造構と同じような造構が第一調査区東南の角にも検出されているところから、この構の下部がそれに統くことも十分考えられた。又、この溝の掘られた目的であるが、當時、水を流す為の川としては、底の砂の状況等から考えて疑問が多い。柱穴列と同じ面から落込んでいるところから、柱穴列の建造物を雨水から守るために溝ではないだろうかとも考えてみたいがどうであろうか。



第9図 溝状造構実測図



第10図 石器実測図(i)

### 第3節 遺 物

#### 1. 石 器

石器は、総数39点である。39点の内訳は、打製石斧6点、磨製石斧1点、凹石1点、石錐2点、特殊磨石1点、石鏃11点、搔器16点である。

##### 【打製石斧】

打製石斧は、6点あり、形状、大きさなどから4類に細別した。

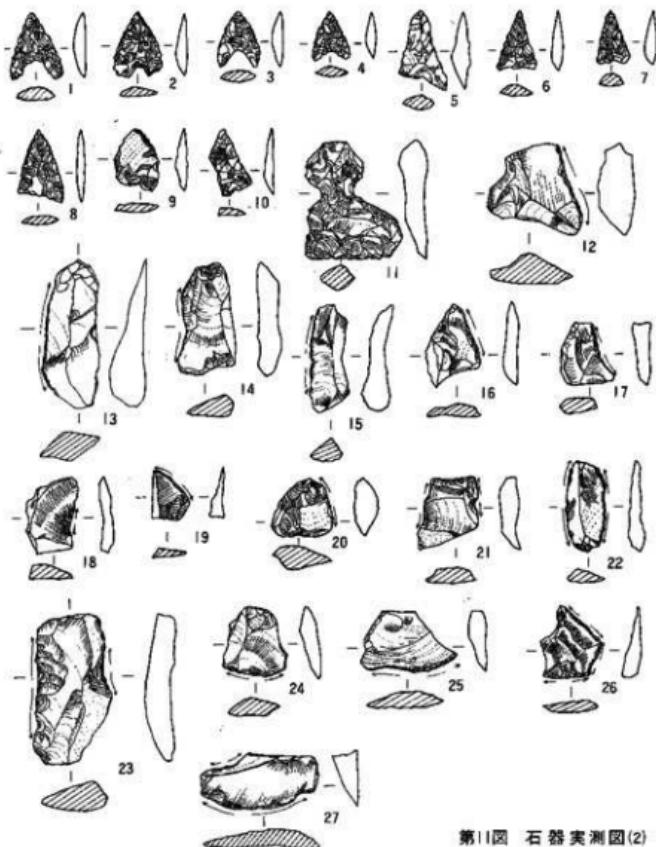
##### 第1-a類 (図10-1・2)

大型のバチ型石斧で、片面に一部自然面を残すが、ほとんど全面を調整してある。2は、欠損しており、調整も荒い。

##### 第1-b類 (図10-3・4)

中型のバチ型石斧で、どちらも欠損している。石質は、3は粘板岩製、4は砂岩製である。主要作業部位の先端は、細かな調整が行なわれている。

##### 第1-c類 (図10-5)



第11図 石器実測図(2)

砂岩製の石斧で片面に自然面を大きく残す。

#### 第1-d類(図10-8)

自然石を利用し、長軸の方を打ち欠いただけのものである。石の大きさ、重さを利用して使用したと思われる。

#### 第2類 局部磨製石斧(図10-7)

乳棒状磨製石斧である。刃部は、始刃状で、刃部の部分のみよく磨ってある。

#### 第3類 特殊磨石(図10-6)

表面なめらかな自然石の一部分に擦った痕やわずかに敲いた痕を残すもので、これを特殊磨石とした。6は、側縁部に磨滅痕がある。この石器の用途は、獣皮のなめし工具、植物資源の処理用具ではないかという推測もなされている(注1)が、今後の研究をまたなければならない。

#### 第4類 四石（図10-9）

自然石を利用したもので、片面のみ一窓ある。

#### 第5類 石錘（図10-10・11）

10は、切目石錘で長軸の方に切目を入れた縦形のものである。11は、長軸の方を打ち欠いたものである。この遺跡と地つづきの御射山遺跡第一地区からも、石錘が5ヶ出土しているが、そのうち切目石錘が1ヶ出土している。また形も附円形の偏平なものと細長いものの2形態みられる。

#### 第6類（図10-12）

よく磨いてある石で、装飾用にする物の未完成品と思われる。

### 【石 錘】

#### 第7類（図11-1~4）

わたくりが大きいもの。ほとんど完形で、表面の仕上げの剥離は丁寧に行なわれている。

#### 第8類（図11-5~7）

わたくりが少しあるもの。両面共に剥離を加えて調整したものが多く、先端を鋭く尖らせてある。5は、チャートで、残りは黒曜石製である。いずれも脚部を一部欠損している。

#### 第9類（図11-8）

側縁部の長い二等辺三角形を呈している。両面共仕上げの調整が丁寧に行なわれている。

#### 第10類（図11-9）

製作途中と思われる石錘をこの類とした。両側縁部を簡単に剥離しただけのものである。

#### 第11類（図11-10）

上記のいずれにも属さない不明なものをこの類とした。

#### 第12類（図11-11）

石匙をこの類とする。黒曜石製、横型の石匙で仕上げの調整が丁寧である。刃部の一部が欠損している。

### 【搔 器】

不定形の石器を一括して搔器とした。ほとんどが剥片に簡単に調整をえたものである。これらをさらに、下記のように分類した。

#### 第13類（図11-12~20）

片側縁だけ、調整をしてあるものをこの類とした。石器全体を調整することなく、片側縁のみ小さな剥離で、刃を調整してある。ほとんどが、縱長剥片である。

#### 第14類（図11-21~23）

両側縁を調整し、刃部を形成しているもの。主要作業部位が下部にある。

#### 第15類（図11-24・25）

下部を剥離調整し、刃部を形成しているもの。主要作業部位が下部にある。

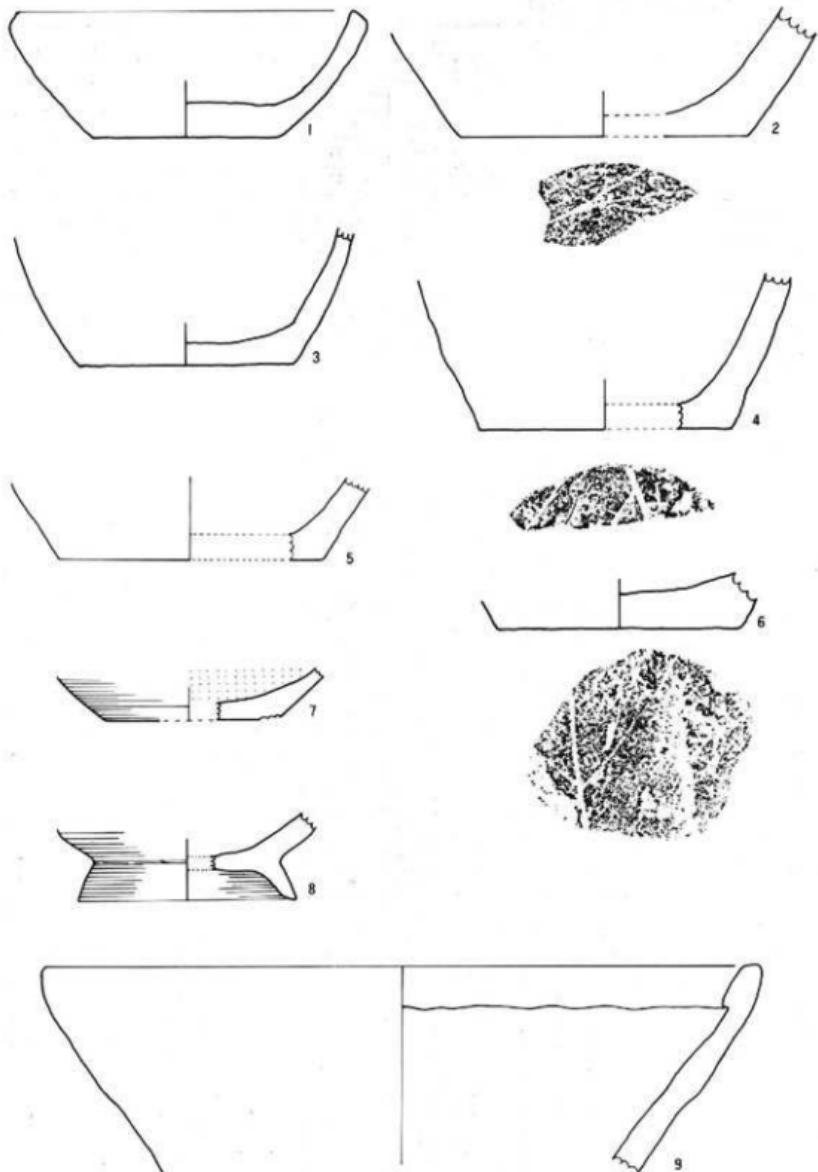
#### 第16類（図11-26・27）

下部と側縁に剥離を施し、調整したもの。

注1 いわゆる「特殊磨石」について 「信濃」第28巻4号 八木光則

## 御射山遺跡第二地区出土石器

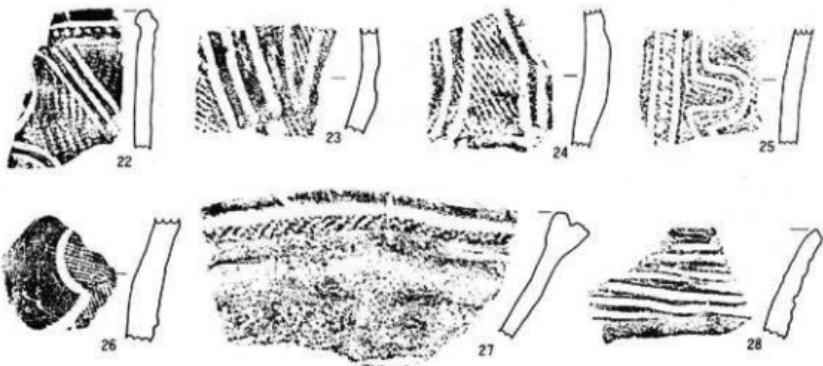
番号	辨別番号	器種	法量			材質	現存状態		出土位置	備考
			最大長さ	最大巾	重量		完形	欠損		
石器 1	10	第1-a類	14.6	6.3	320g	砂岩	○		23N	
2	"	第1-a"	7.4	6.9	210g	"	○		23M	
3	"	第1-b類	8.5	6.1	110g	粘板岩	○		22P	
4	"	第1-b"	5.2	5.6	60g	砂岩	○		28P	
5	"	第1-c類	9.7	4.2	65g	"	○		26O	
6	"	第3類	7.5	6.0	255g	"	○		23N	
7	"	第2類	9.0	3.5	130g	"	○		24N	
8	"	第1-d類	12.0	10.3	640g	"	○		29M	
9	"	第4類	6.2	6.1	150g	"	○		26N	
10	"	第5類	5.6	2.3	20g	粘板岩	○		24M	
11	"	第5"	4.1	2.7	20g	"	○		27O	
12	"	第6類	4.6	2.7	20g	斑岩	○		26P	
石鎌 1	11	第7類	1.6	1.6	0.90g	黒曜石	○		26O	
2	"	"	1.8	1.6	1.00g	"	○		25O	
3	"	"	1.3	1.4	0.70g	"	○		24M	
4	"	"	1.3	1.2	0.40g	"	○		23N	
5	"	第8類	2.2	1.5	1.25g	チャート	○		25O	
6	"	"	1.9	1.3	0.70g	黒曜石	○		23N	
7	"	"	1.7	1.0	0.60g	"	○		20M	
8	"	第9類	2.1	1.5	0.80g	"	○		25Q	
9	"	第10類	1.8	1.4	0.90g	"	○		24D	
10	"	第11類	2.2	1.0	0.50g	"	○		23N	
11	"	第12類	3.9	3.1	8.40g	"	○		24N	
12	"	第13類	2.6	3.1	8.00g	"			28M	
13	"	"	4.9	1.8	8.50g	"			23N	
14	"	"	3.6	1.9	5.70g	"			24L	
15	"	"	3.5	1.3	3.40g	"			21O	
16	"	"	2.3	1.8	1.50g	"			20P	
17	"	"	2.0	1.7	1.50g	"			23N	
18	"	"	2.3	1.6	2.20g	"			28N	
19	"	"	1.6	1.2	0.60g	"			26P	
20	"	"	1.9	2.0	2.55g	"			28Q	
21	"	第14類	2.3	1.9	2.65g	"			25M	
22	"	"	2.9	1.3	1.85g	"			23N	
23	"	"	4.9	2.5	13.20g	"			23N	
24	"	第15類	2.2	2.1	2.15g	"			24P	
25	"	"	2.0	3.1	2.45g	"			21Q	
26	"	第16類	2.4	2.0	1.55g	"			26O	
27	"	"	1.9	3.8	5.70g	"			28O	



第12図 土器実測図



第13図 土器拓影(1)



土器出土位置

1. 28-M	2. 27-O	3. 23-N	4. 29-O	5. 26-L	6. 28-Q	7. 27-O
8. 29-O	9. 29-O	10. 28-P	11. 27-O	12. 24-L	13. 28-M	14. 23-N
15. 23-N	16. 23-N	17. 24-L	18. 29-O	19. 28-P	20. 29-O	21. 29-O
22. 28-P	23. 26-P	24. 25-O	25. 26-L	26. 27-O	27. 25-Q	28. 20-N

第14図 土器拓影(2)

## 2. 出土土器（第12図）

### (1) 土師器

环形土器（第12図-1）は23-Nグリットからの出土で、約半分を欠くが、口唇部まで一部が残っているため、全器形を推測することは容易にできる。口唇部がやや内側に曲ることが特徴で、この種の土器としてはとても肉厚である。器面の調整は内外共に難であるが、刷毛目痕を見ることができる。又、底部は笠による調整痕が見られる。胎土中には多量に石英粒、雲母を含み、焼成は良くない。

第12図2・3・4・5・6は土師器の變形土器の底部片で、共に外側の器面はよく平らに仕上げているが、内面は調整が荒い。2は特に粗雑の感じが強く笠を縦横に走らせている。2・4は器肉が厚く、胎土中には小石や雲母を多量に含み焼成はあまりよくない。4・6は木の葉底である。

5は繩文中期の深鉢の底部で面に繩文を施してある。器肉の半分内側だけが黒くなり、器内面には煤が付着し二次的に火を受けた器と思える。外側土器面は黄褐色を呈し焼成は良い。

7は内黒の環であり、高台の部分がとれてしまったものである。内面は縫合のみがきを丁重にしてあり内外共に美しい。糸切り底である。

8は高台付きの壺の底部片で、回転台の上に伏せて高台を付けてからその部分を調整している。底に糸切り痕を残し、器面は黄褐色を呈し、胎土中には石英粒を含んでいる。

9は縄文時代中期の浅鉢の口縁部で最大径が口唇部にあり口唇部を15mm程内外に折り返している。器面内側は丁重にハケで仕上げてあり平らになっている。内面に比べ外面はきわめて雑な仕上りであり器は凹凸がいたるところにあり、石英粒が顔を出してごつごつした感じである。

## (2) 縄文土器 (第13図)

### 第1類 (前期土器) 1, 2・3~5

1は、口縁部で、細い粘土紐を張り付けて、文様を作っている。又、半截竹管を用いて竹管特有の爪型の文様を口縁と平行に帶状に付けている。器厚は、6mm程度と薄く焼成は、良好である。北白川式系統であろう。2は、半截竹管を用いて、文様を付けてあり、縄文前期末の十三菩提式土器に類似する。3~5は、前期最終末に属するもので、半截竹管による斜格子文、爪形文を主とした文様構成が主体となるのが特徴である。駒ヶ根市中沢、横山B遺跡第1号址出土土器を標準とする。

### 第2類 (中期土器) 6~21

6~11は、中期初頭土器といわれているもので、いずれも半截竹管を多く利用して施文している。10~11は、雲母を多量に含んでおり、ともに焼成の良い堅い土器である。12~14は、井戸尻II式土器と思われる。器肉も厚く、見るからに大型の土器の一部であることがわかる。胎土、焼成ともに良好である。15~21は、井戸尻終末期の土器と思われる。いずれも、粘土紐を器面に張り付けて文様を構成している。15は、口唇部が厚く、内側に折り返って作られている。

### 第3類 (後期土器) 22~27

器面の一部文様で磨り消してあり、後期土器の特徴を現わしている。器面は、縄文を施している。25の土器面には、連続刺突をして文様を作り出している。器肉は、5~7mmと割合い薄く、胎土中には雲母を含んでいる。黒褐色と茶褐色の2種類に分かれる。

27は、浅鉢の口縁部破片で精製土器であり、口唇部の中央に沈線が1本入り、その縁に縄文が施文されている。胎土中には、多量の雲母が含まれている。縄文後期壺之内II式土器に属する。

### 第4類 (晚期土器) 28

28は、口縁に添って籠がきによる沈線を口縁にそって並行させ施文している。赤褐色を呈し胎土、焼成ともに良好である。水式の1部を構成する土器である。

林 茂樹・竹入洋子

## 第IV章 まとめ

御射山第二遺跡は箕輪町東部の山麓附近に立地する遺跡の一つで、一帯は縄文時代からの遺跡濃密地域であり、農業基盤整備事業により、破壊されたことが目前になったため緊急発掘調査を行なうことになったのである。遺跡の発掘の状況は、前述のとおりであるが、御射山第一遺跡と共に出土遺物が多量であるため今後整理と研究にはかなりの時間が必要と思われる。ここでは発掘調査の過程において把握し得た所見と問題点を記してまとめたい。

### 1. 本遺跡の構造と規模

基盤整備事業の関係上、必ずしも遺跡の中心部を調査したかは疑問であるが、第二遺跡の調査面積は約500m<sup>2</sup>であり、その内に柱穴列址一ヶ所、集石遺構一ヶ所、溝状遺構一ヶ所が検出された。この中では柱穴列址が中心的遺構である。この遺構がどのような性格であるかにつき、様々に想像したが、決定し難く、上伊那における三例についてその内容を記し、比較検討を試みた。

#### (1) 町内、木下猿樂遺跡

昭和49年に調査したもので、遺構の規模は東西13.5m(約7間)、南北17.5m(約10間)面積230m<sup>2</sup>(約70坪)柱穴の本数133本、柱穴間隔は南北100~120cm、1列に13箇以内、このようなものが10列並ぶ、列は南北にはきちんと通っているが、東西には不規則の場合が多い。柱穴間隔も南北に比べて10cm程度短くなっている。地盤の状態は東北に2度30分程度、緩やかな傾斜をなしでいる。柱穴もそれと同様それにならって傾斜している。柱穴の底部はあまり圧力が加わった様子もなく、柔らかであるところから、あまり重力の加わらない構造物であったと思われる。

次に遺構の性格を想像したとき、本遺跡の地名が猿樂という特殊な地名であるところにより、能楽の舞台ではないかという説、倉庫であろうという説、農耕の物干場ではないか等の説があつたが、いずれも決定するだけの資料に欠け結論はでていない。柱穴址の時期決定には、伴なう遺物が少くなく疑問点が多いが、中世及び江戸時代の陶器が少量出土した。

#### (2) 中央道、堂地遺跡

昭和48年度に中央自動車道の発掘調査において検出された遺構である。報告された実測図により遺構の概略について考察した結果、遺構の大きさは、東西約7.5m、南北約15m柱穴間隔は1.5mで6列になっている。穴の径は35~40cmで、深さ25~30cmとなっている。柱穴の南端はまことに不ぞろいである。遺構はほぼ平らな面に位置した南北に長い状態である。「柱列址」という呼び方をしているだけで、遺構の性格についての推測はされていない。

#### (3) 飯島町柏木遺跡

昭和49年に発掘調査された飯島町柏木遺跡においても類似した柱穴址が検出されている。その範囲は、東西8m、南北5m、面積40m<sup>2</sup>で東西に3列になっている。柱穴間隔は80~100cmで北側と中央は8箇、両側は9箇よりなっている。柱穴の大きさは10~30cm、深さ10~20cmで直穴である。遺構内からは焼土や遺物は検出されず、時期の決め手となるようなものは全くなかった。こうした柱穴は、果して獨立建造物として成り立つかどうか疑問である。建物址ではないとする

と、農作物の乾燥場のような施設かもしれない。（以上報告書より）

以上が本遺構に類似する3例の内容である。内容を比較検討してみると、立地する条件、柱穴の面積、数、柱列の状況等必ずしも同じではないが、類似点は多い。しかし3例共に遺構の性格ははっきりしていない。この辺がこの種の遺構の難しい面を示しているところであろう。本遺構の状況は前述（第2節遺構）したとおりであるが、全体的な様子や柱穴の状況は、柏木遺跡の様子に似ている。柱穴の配列状況においては本遺構が最も整然としている。穴の大きさ、深さ、底部の堅さ等の状況においては大差ないと思うが、猿樂遺跡の場合柱穴が方形になっているものが多い。次に遺構の時代的比較においてあるが、3例共にはっきりと決めていない。本遺構の場合は、灰釉陶器がほぼ全面より出土しているのでこの出土陶器をもって時期決定を考えた。しかし柱穴址のような遺構を落込み確認面にて発見された遺物で時期決定をしてもよいものか、又確認面上の黒土層中から柱が掘り込まれていることが十分考えられるが、黒土層中では柱穴を検出することが非常に難しいため、柱穴掘り込み面における時期を決定しにくいのである。

次に柱穴上に設けられた構造物の推測であるが、猿樂遺跡においては地名から推定して舞台跡という説、倉庫的な建物跡、農耕の物干場のようなものではないか、又、柏木遺跡においては掘立て建造物址として成り立つか疑問である。という結論であり、いずれも推定の域をでていない。

## 2. 本遺構についての推測

### (1) 平安期末の倉庫址と考える説

東西に長く整然と並んだ穴の址は、地上建造物をさえた掘立て柱の跡と想像したい。遺構を大きな倉庫的なものと想像した場合には、柱穴底部に圧力が加わり、堅くなるはずと考えたくなる。飯島町柏木遺跡においても柱穴底部の堅さの問題に触れ、倉庫的な建物を考えた場合には、底部に圧力が加わり堅くなるはずではないかと報告している。しかし本遺構のように柱数がぎわめて多く、總柱のようになっている建て方においては、一本一本の柱にはそんなに強く圧力はかかりず柱穴底部が、堅くならなかったと考えるがどうであろうか。これが倉庫址と推定された時同時期の集落が当然考えられなければならない。本遺跡周辺からは同時期の遺物を多数出土する遺跡が存在するためこの部分においては問題はない。倉庫址と推測した時、規模的に大き過ぎるくらいがある。同時期における倉庫址の類例よりはるかに大きく細長い。このように大規模な倉庫を建てるような場合には、特別な計画的村落を想像したくなるがいかがなものであろうか。

### (2) 御射山神社に関連する説

遺構の北方（約100m上方）に御射山神社がある。この神社が16世紀にここに位置していたことは確実である。（天文年間に武田信玄が、又、天正11年には木曾義昌が土地を寄進している。）しかし柱穴の時期を平安時代末と推定しているので、神社に関係する建物と考えた時、神社の創立年代をその時期近くにまでもっていかねばならない。御射山社の由来、伝承について参考に記すと、三日町の御射山社は以前は西山（西箕輪）にあり、今もその地を御射山平といふ。現在は春日街道沿いの宇前原に御射山社址が残り、この社址は古い由緒をもち、とほうもなく大きなものであったといわれる。明治9年の南箕輪村誌によると、社址は当時、東西が360m、南北324mもある広い原野で前原といわれていた。建御名方命、八坂刀売命の二神を、大同4年（809）に坂上

田村麻呂が勅を奉じてまつられ、穂屋の大祭をおこなったと伝えられる。現在三日町上棚に神官の唐沢氏があり、以前は西箕輪にいたという。唐沢氏が三日町に移り住むによって、西箕輪に行なわれていた穂屋の神事も廃され、現在三日町にて行なわれている。

参考として穂屋の神事について概要を記す。

箕輪町木下に鎮座する箕輪南宮神社の秋宮が現に三日町にあり、従って木下の神社は春宮である。神体はこの両社を春秋交互に遷座する。すなわち、七月木下で夏祭を終って神体を神輿によって前後騎馬の神官や村役人が護り奉納の稚児行列が従って三日町の秋宮に遷座する。九月に三日町の産土社である御射山三社の祭典には、御府（又は神府、御宿ともいう）社の神体と共に神輿によって神官村役人守護し村内一巡した後三日町の内、上棚の山麓に設けられる仮宮に移して祭典を執行する。即ち箕輪南宮神社の神体がこの時は御射山三社の神体となる。これを穂屋御狩の神事と呼ぶが、祭典が終って神体はそれぞれの宮、即ち神府社と秋宮に戻るのである。12月27日の夜丑の刻にこの秋宮の神体は「お神渡り」と称え神官二人が白装束にてひそかに秋宮から春宮に遷すのである。この時の神渡りは他に見られてはならないとされ、又これを見た者は災厄に逢うとして、その夜は近郷は一段と早寝をする例としている。

御射山神社に関連した造構を考える時、次の三つの場合を推測することができる。

- ① 穂屋の建物址とする。
- ② 神社拝殿址とする。
- ③ 舞台址とする。

この三つの場合についてそれぞれに次のような推測をした。

#### ① 穂屋の建物址と考える説

御射山神社の中心的な建物であり、現在は第1図及び写真に示すことである。南北に長い建物で、柱間が3m(10尺)で3間隔、東西3m(10尺)2間隔で、3m四方の広さの建物が三間になっている。現在の建物を見る限りでは柱は12本である。中央より後方が一段高くなり、屋根は勾配のやや急な切り妻になりカヤ葺きで上をトタン葺きにしてある。背面は青ガヤを並べ、穂屋の名残りを見ることができる。第2図は明治4年の書き上げ御射山絵図である。これを見ると穂屋は三つが別々に建てられている。唐沢神官の説明でもこれが本来の状態であり、現在のものはごく最近に建てられたものという。そして三つの建物にはそれぞれに祭神がいるのである。穂屋の起源は前述の伝承から推測するように古く現在も伝えられているので時代的には問題はないが、造構の状態からは穂屋の建物と推定することは少し無理ではないかと考える。

#### ② 神社拝殿址と考える説

第2図において見てもわかるように明治4年の書き上げ絵図には拝殿は無い。これはお上の命により拝殿を造れとの達しにより造られたものであり、これと結び付けることはできない。

#### ③ 舞台（舞台）址と考える説

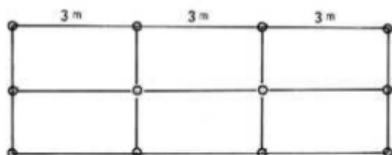
第2図に示されている舞台は現在は無いが、建てられていた址は残っている。神社に舞台は付きもので、現在でも舞台は残っており見ることができる。図に示されている舞台の規模を見ると7間2尺(13m余)と4間(7m余)の大きさになっている。現在も神社にはいくつか舞台が残

っているものがあり、大きさをみてもこのくらいである。さて本遺構とこの無台を比較したときほとんどピッタリ合うのである。又、現在の神社、舞台のあった場所及び穂屋の位置の地形が、遺構の検出された地形とよく似ている。舞台が傾斜面の下方にあり、その舞台を見おろすように自然の斜面を利用して見物人席がある。町内三日町の公民館になっている建物も以前は舞台で、客席は自然の傾斜地を利用した所である。福寿の神社も舞台が先年まで残っており、同じように傾斜地を利用している。これらのことから考え、現在の神社が今の位置に建てられる以前には遺構の検出された位置当りにあったのではないかと推測したのである。遺構の位置より上方（北寄り）にゆるやかな傾斜面が約20m続き、その後方がほぼ平らな面になっている。舞台の址と考える理由の一つとして、傾斜地に建てられていることである。倉庫や他の建物であったなら平地を利用するのが当然である。それにもかかわらずあえて傾斜地に建てたということは、そういう地形を利用する必要があった建物と考えるのであるがどうであろうか。舞台址と推測したが、これにもいくつかの問題は残るのである。神社が建てられたのが文安二年（1445年）という伝えがあること。灰釉陶器が遺構面から出土しているが、遺構をこの時期に平行するものと考えるのか、それとも、もっと新しく14世紀ころの建物址とするのか、など決定的な答えを出すにはこれらいくつかの問題を考えなければならない。今後このような遺構の類例が多くなることを期待し、今後の研究に待ちたい。（神社のことなどに助言をいただいた三日町唐沢神官さんに心からお礼を申し上げるだいです。）

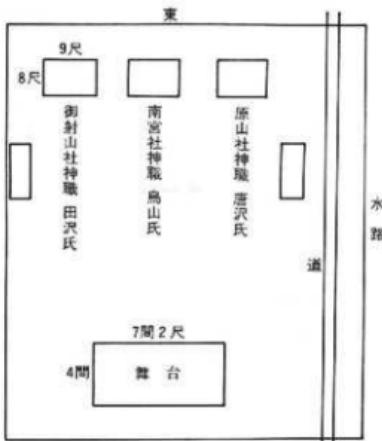
（林茂樹、柴登巳夫）



現在の穂屋の写真



現在の穂屋の柱状略図（第1図）



明治4年書上げ御射山繪図（第2図）

# 図 版



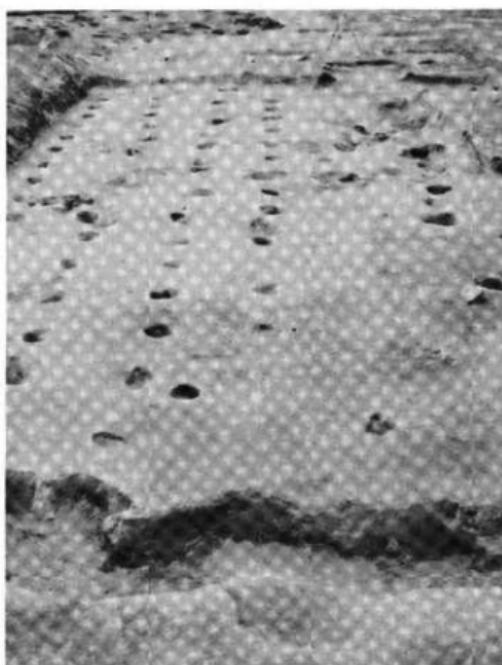
遺 跡 速 景



第 1 図版 遺 跡 近 景



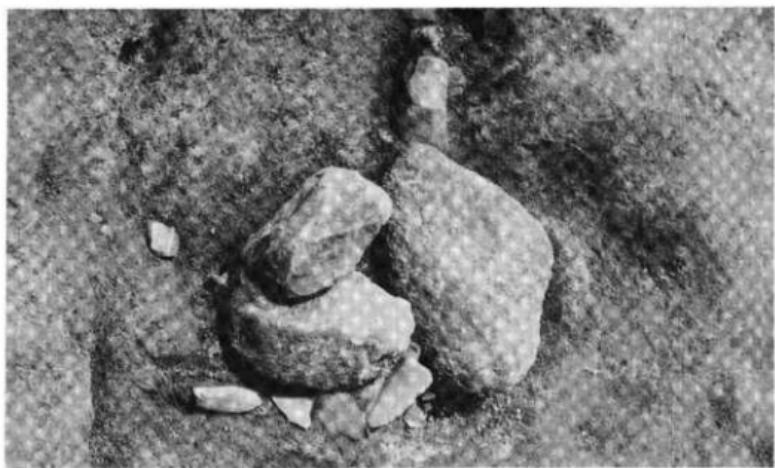
遺構全景



第2図版 柱穴列址



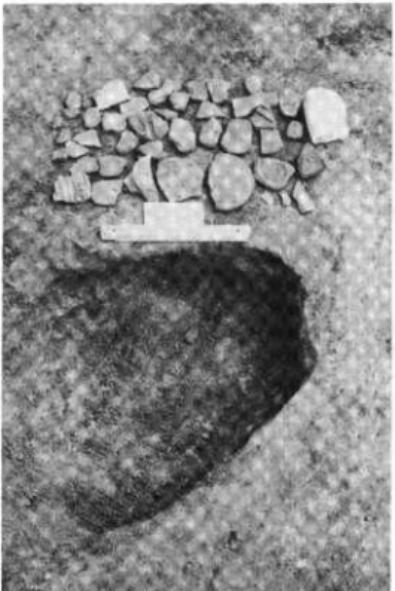
溝状造構



第3図版 集石造構



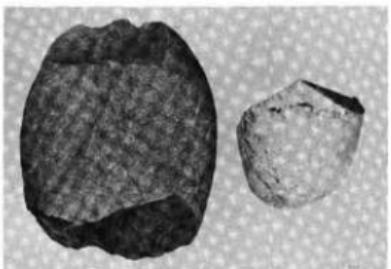
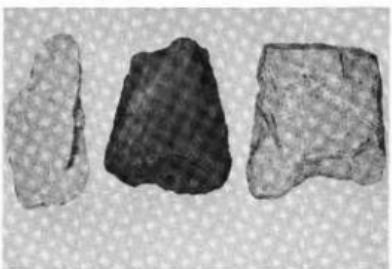
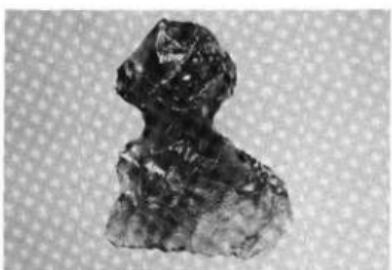
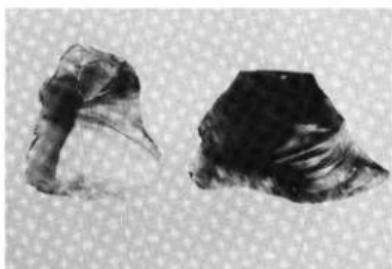
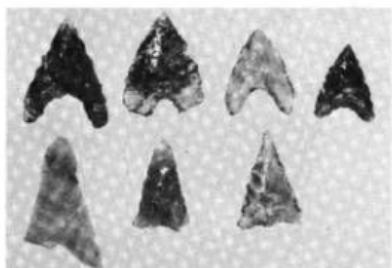
第4図版 調査状況



遺物出土状況



第5図版 調査参加者



第6図版 出土石器



第7図版 出土土器

## 御射山第二遺跡

～緊急発掘調査報告書～

昭和55年3月31日 印刷  
昭和55年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会  
印刷所 伊那市 小松総合印刷㈱